2018年(平成30年)6月27日(水曜日)　日本農業新聞

きょう歩き

日本の協同組合運動

自治が土台で風土化

農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一氏

協同組合運動はイギリスのロッチデール公正開拓者組合に始まり、ドイツのシュルツェ系信用組合法にライファイゼン系の原則を織り込んだ産業組合法が1900年に成立することによって、わが国の協同組合の歴史は扉が開かれたとされる。

こうした一方で日本にも独自の流れが存在し、この流れの上に産業組合法によってヨーロッパ流の協同組合運動が合流・接ぎ木されたとの認識が定着しつつあるように思う。すなわち江戸時代の後期、19世紀に至誠・勤労・分度・推譲を薦め、「報徳社」を生み出すことになった二宮尊徳、「先祖株組合」によって農村振興に取り組んだ大原幽学の二人が、日本協同組合運動の祖と広く受け止められつつある。

この二人からさらに100年さかのぼった江戸中期、助け合いの心と協同の精神を尊重することによって武蔵野新田開発を成功に導いたのが川崎平右衛門である。

武蔵野新田開発は8代将軍・徳川吉宗によって行われた享保の改革の目玉の一つであったが、開発は遅々として進まず、総責任者の大岡越前守忠相が百姓の中から新田世話役に抜てきしたのが川崎平右衛門である。

平右衛門は、肥料の共同購入、農産物の有利販売、備蓄などを進める養い料組合の設立等々に取り組み、百姓自身が協力し合う百姓組合ともいうべき取り組みを重視した。

平右衛門こそが、年代からすれば日本協同組合の祖であるといって過言ではない。この是非はさておき、協同の取り組みが時代をさかのぼって展開されてきたことは間違いない。

そもそも相互扶助なしに人類の生存はあり得なかったし、水田稲作の導入は協同しての作業を必須とした。こうした土壌の上に、秀吉による刀狩と検地。そして江戸時代に入って兵農分離が徹底され、農村は百姓の自治に任されることになった。村落共同体の維持のために百姓は相互扶助し、自治が土台となってわが国の協同の取り組みは風土化したのではないか。こうした中で協同の力を引き出していったのが川崎平右衛門であり、二宮尊徳、大原幽学であった。

協同の源流について、村落共同体が発生した中世から近世にかけて新たな視点で見直してみることが必要であるようだ。

（次回は7月4日付）